

《関谷 直人》氏

「いのち輝かせるために今死と向き合おう～キリスト教から見た「いのち」「死」～」

### 『死』について経験したことはありますか

最近ではほとんどの方が家では亡くなりません。大学で授業をして学生さんに聞いてみても、ほとんどの方がペットの「死」ぐらいしか経験がありません。本当は人間の死を経験してしかるべきですが、家庭から病院、施設へと「死」の場所が変化したということは、死が隠されているということが言えると思います。

また、私は「死」が現代社会においては様々に偽装されていると思います。ゲームでは、死んでも生き返ることができ、1人死んでも4人ぐらいまでストックがあります。テレビショッピングでは、「幾つになっても若くいることができます」「老いることなんてないです」という商品宣伝しています。でも、よく考えてください。そんなことは絶対ありません。どんなに健康に気を配っていても、私たちの人生には例外なく終わりがやってきます。不平等なことがまかり通っている这个世界ではありますが、この「死」ということだけは万人に分け隔てなく与えられる、とても平等なものです。私たちの「いのち」はどこから来たもので、何か誰かから預かったものであるという、この感覚は実は大変大事だと思います。

私たちは自分の「死」のタイミングは正確にはわかりません。どんなに医療技術が進んだとしても超えることのできない人間の限界があるはずですが、しかし、私たちはメディアの幻想や、あるいは「死」が隠蔽されたりする社会にいて、人間至上主義というか、人間の限界を顧みません。実は明日のことなど、本来はとても不確かなことです。私たち人間の手の届かない、決定権のない事柄については、私たちはもっと謙虚であるべきだと思います。

### 死への準備

キリスト教の終末論から言えば人に与えられた時間は直線的で、輪廻転生ではなくやり直しの効かないもので、一回限りの一期一会の全責任を自分が持つということです。人間は本質的に死すべき存在です。これはキリスト教のみならず、全ての宗教で言われていることです。死は避けることができないものでかつ、原則自分で死のタイミングは決定できません。それを知っているのは神様である、とキリスト教では言っています。昔の人は、神様から祝福された人間はある程度死の準備の時間が神様から与えられると認識していました。「寝ている間にポックリ逝く」等の突然死は当時のヨーロッパでは良い死に方ではありませんでした。きちんと死ななければならなかったわけです。

当時のヨーロッパ社会では「死への作法」が存在しました。「死に方」があったということです。ある女性の死に方ですが「彼女は自らの葬儀の手配をし、事前に靈魂の安息のミサを唱えてもらい、周到な準備のもと、あらかじめ自分が設定しておいた日時に他界した」という話があるそうです。私の曾祖母も鶴亀の欄間のある部屋に家族全員を呼び、大体自分が決めた日に亡くなりました。

また、当時の社会では「死」は公開されていました。ある女性の話ですが「彼女はペットの帳を全部開けさせ、ロウソクを灯し、自分の周りに多くの人を集め、罪を告解し、死の儀式を取り仕切った。」といひます。最近ではネットを利用して自分の終末期のことをブログで書いて共有するという「死の社会化」も一方ではあります。たった一人で死んでいくのは嫌と思っているのでしょう。

この動機の根底に「メメント・モリ（死を覚えよ）」という中世の標語とのつながりが見える気がします。

死者が墓から出てきて踊っている「死の舞踏」等の絵をはじめ、当時は「死」ということが生の領域に食い込んでくるような時代でした。それから見れば今は死のリアリティはなかなか無いかもしれませんが、私たちもこういったことをもう一度思い起こしたいと思います。

昔の方がこのようにキリスト教の精神を学び、教会に行き、啓蒙や絵画等によって自らの死を学んでいたことは、当時行われていた「死」の教育なのだと思います。自分の「死」を事前に学ぶことはできません。死は一回限りの一発勝負です。

だから、死に行く人と出会うことによって「死」について学ぶことがあると思います。

## 歌の力

私がホスピスのプログラムの研修を受けたとき、あるご婦人の話を聞きました。容体がいよいよ悪くなった段になり、セラピストから何がしたいですかと問われた際、彼女は歌を歌いたい、『マイウェイ』を歌って録音したいと。自分の人生の最後にそれを歌い録音し、そして本当に安らかに逝かれたそうですが、聞くと、若い頃からバーでいつもそれを歌っていたとのこと。人生の最期に歌って残すことが自分にとって必然であり、一つの区切りとなったようです。私は歌にはそういう力があると思っています。何か自分にとって大切な思い出につながった歌を歌うことはきっと意味があるのだろう、とそのとき思いました。

それ以来「マイソング」と名をつけ、魂の癒しになればと思って歌っています。

私は、ホスピスでコンサートをしていたときに少し時間が余り参加者の皆さんに、「何かリクエストありますか」と聞きました。そうすると、ご主人が末期で重篤な方だったのですが、奥様と2人でいらっやっていて、『見上げてごらん夜の星を』をリクエストされました。それを私が歌いますと、ご主人はほとんど歌えるような状況ではありませんでしたが、少し口をあけて歌っておられました。歌詞は少しうろ覚えだったのですが、大変喜んでいただいたようでした。

後日、連絡が来ました。「この間のコンサート、ありがとうございました。実はあの『見上げてごらん夜の星を』は、2人の出会いに関係する歌でした。あの日、2人で病室に戻ってから出会ったときの思い出の話をしました。主人は程無く亡くなりましたが、最後にあの歌を聞いて、出会ったときの思い出を2人で共有出来てよかったです。本当にありがとうございました」と。

ご夫婦で「死」を間近に迎えられていたはずですが、コンサート中も大変穏やか、かつにこやかで、そのお姿は「死ぬってそんなに怖いことでもないですね」と私に語っておられるようでした。一緒に歌っていて、この方が数日後に亡くなったのを聞いて、私の中で「死」ということのイメージが何か1つ足されました。言葉ではありません。「歌にはこういう寄り添える力もある」と改めて感じさせられた経験でした。